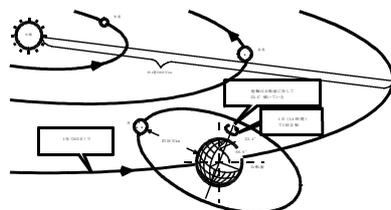




1月は“行き” 2月は“逃げ” 3月は“去る”と言います。  
この間、正月を祝い、第3学期が始まったのに、もう2月を迎え、卒業・進級についての準備も間近に迫りました。

さて、今日は「立春」。暦の上では今日から「春」です。窓から差し込む日差しにもどことなく春の気配が感じられます。



ところで、「立春」ということばはよく使われますが、どのような意味があるか知っていますか。立春は、二十四節気の1つで、節分の翌日ということはすでに知っていると思います。今年も、今日、2月4日（木）です。

立春は、旧暦の1月1日だという説があります。（旧暦では、1年ののはじまりは立春からと考えられていました。）わかりやすく言えば、冬と春が分かれる日、寒さが終わって春の始まりの日という意味だそうです。そのことから、立春を過ぎてから最初に強い南風が吹くと「春一番」というふう天気予報で説明しています。

※立春を新年と考えれば、節分は大晦日にあたり、この日の夕方、前年の邪気（悪いこと・鬼）を追い払い、良いもの（福）を呼ぼうと「豆まき」をするそうです。

しかし、立春を過ぎても寒い日が続くのが現実です。2月の後半に雪が積もることもあります。「立春」のこの日は寒さの頂点であり、この日から少しずつ暖くなるのだという説明も聞いたことがあります。立春は、暦の上では冬至と夏至の中間ということです。

まだまだ暖かにならないが、もうすぐ春が来ることを期待し、縁起のよい日として位置づけたという人間の知恵だという説もあります。

この時期、手紙の書き出しにも多いのが、「立春とは名ばかりの厳しい寒さが続いております」という表現ではないでしょうか。また、「寒さの中にも庭の木々のつぼみがふくらみはじめております」などという元気が出る表現もあります。

昔の人々は、季節の節目にさまざまな行事を考え、あいさつ文を考え、互いの人間関係や信頼関係を確かめ合い、人と人との絆を強めていったのです。

立春の日になると「立春大吉（りっしゅんだいきち）」と書かれたお札が貼ってあるのを見かけたことはありませんか。

「立春大吉」は、魔除けのお札で、禅宗のお寺の習慣からきているものです。

お札には、縦書きで「立春大吉」と書かれています。真ん中に線を引いてみると、4つの文字がすべて左右対称になっています。表から見ても裏から見ても、「立春大吉」と読むことができます。

立春は、節分の次の日であることからなのでしょう。こんな話が伝えられています。

鬼が玄関に「立春大吉」のお札が貼ってある家に入ってから、ふと振り返ると、同じように「立春大吉」と書いてあるお札が目にとまります。（お札を裏から見ている）鬼は、この家にはまだ入っていません。と思い込み、逆戻りして出て行ってしまいます。

というわけで、「立春大吉」のお札を貼っていると、1年間を平穩無事に過ごすことができる。と言われています。

ところで、本校では？ 安心して下さい。生徒昇降口に貼ってありますよ。

「立春」の話に続けて、「節分」についても紹介します。

「立春」の前日が「節分」です。今年は、2月3日（水）でした。

昔は、春・夏・秋・冬の各季節の始まりの日（立春・立夏・立秋・立冬）の前日を「節分」と呼んでいましたが、江戸時代以降は「立春」の前日をさすことが多くなりました。

「節分」とは、「季節を分けること」も意味しています。

季節の変わり目には邪気（鬼）が生じると考えられており、それを追い払うための悪霊払いの行事が日本では、昔から行われてきました。節分の行事はもともと「追難（ついな）」という宮廷で行われていた儀式が民間に伝わったという説があります。

近代では、節分当日の夕暮れ、柊（ひいらぎ）の枝に鯛（いわし）の頭を刺したもの（柊鯛）を戸口に立てておいたり、お寺や神社で豆まきをするようになりました。

豆をまき、まかれた豆を自分の年齢（数え年）の数だけ食べる。また、自分の年の数より1つ多く食べると、体が丈夫になり風邪をひかないというならわしのあるところもあります。

豆は「魔滅」や「魔目」に通じ、鬼に豆をぶつけることにより、邪気を追い払い、1年の無病息災（1年間、病気をしないで元気に、災難に逢わないで過ごせる）を願うという意味あいがあります。

豆をまくときの掛け声は、ふつう「鬼は外、福は内」ですが、地方によっては、違う掛け声をかける地方もあります。興味のある人は、調べてみてください。

使う豆は、お祓いを行った炒った大豆（炒り豆）です。炒り豆を使うのは、厄を落とした豆から芽を出させない意味もあるそうです。

余談ですが、鬼がやってくる方角を「鬼門（きもん）」といいます。昔の方角の表し方では、「鬼門」は丑寅（うしとら）の方角（北東の方角）です。だから、鬼は牛の角と、虎の皮のふんどしをはいています。（豹がらではありません。）

日本には、鬼が出てくる昔話がたくさんありますが、桃太郎では、十二支の正反対にいる申（さる）、酉（とり・キジ）、戌（いぬ）を連れています。反対にいるのは、鬼が苦手だということだそうです。

また、一寸法師などでは、鬼が訪れた後は幸せがやってくると言われてしています。

### 3学期でなく0（ゼロ）学期として考えよう

本校は3学期制ですから、この3学期は、それぞれの学年の最後の学期になります。この学期は、一般にまとめの学期といわれています。一番短い学期ですが、非常に意義のある学期です。

今回は、この学期の生徒の皆さんの健全な過ごし方のヒントとなる話を紹介します。

先日、ある学校の先生から、「本校では、3学期をまとめの学期の位置づけから、次の進学・進級年度の0（ゼロ）学期として位置づけています」という話を聞きました。

たとえば、1年生の3学期を2年生の0学期と位置づけ、進級の準備を進める。新年を迎え、新しい目標に向かって意欲的になっている皆さんに、この学期を次の年度のスタートのゼロ学期ととらえ、意欲的にチャレンジしてもらおうという考え方は、非常に前向きで、すばらしい発想だと思いました。

少し、自分の意識を変えるだけで学校生活への意識が高くなる気がします。

私は、これまで皆さんの授業に臨む姿勢、生徒会活動や部活動での活躍の姿、学校行事への積極的な参加姿勢などを観て感動してきました。自らの目標を達成しようとする皆さんの頑張りであり、積極的な学校生活への姿勢です。

目標実現に向けての努力は美しく、人の感動を誘います。しかし、その努力も思いつきや気まぐれでは成果を期待できません。ぜひ、この学期を皆さんの新しいステージの準備の時期ととらえ、ゼロ学期のスタートを切ってください。

新しい目標に向かうための姿勢には、もちろん、これまでの生活を振り返り、反省点を改善することは前提ですから、まとめの学期の意味はもっています。このことも忘れないで。

※ 学校の教育活動に対する質問等がありましたらお電話ください。電話 5 6 2 - 2 3 2 5



